

## 2022年度 テクノ未来塾「産業デザイン財団賞」授賞式 報告書

1. 開催日：2023年2月18日（土）午後
2. 開催場所：NPO テクノ未来塾 オンライン授賞式（Zoom 開催）
3. 参加者の地域：関西・中部・関東

今年度の「産業デザイン財団賞」授賞式は、昨年につき、オンライン（Zoom 開催）にて執り行われました。以下のとおりご報告いたします。

### 1. 理事長挨拶（理事長 阿部 惇氏）

テクノ未来塾「産業デザイン財団賞」は、2020年度よりスタートしました。3年目となる今年度も、「夢と志をもった技術者」が、テクノ未来塾の特色である自立・自律という理念を活かし電動バイクの具現化に向かって果敢にチャレンジされたことを称えたいと思います。今後も豊かな未来社会に貢献する独創的な活動を力強く進めていただくことを期待して、ここに表彰いたします。



今年度の受賞者は、専門化・細分化が進むものづくりの世界において、構想から製品の完成まで様々な専門家・関係者を巻き込んで電動バイクの具現化を成し遂げられた「ものづくり共創チーム」の代表、川島卓也さんです。川島さんが、ご自身の会社の経営と並行して、日本製F1マシンの再生をはじめ取り組んでおられる活動の幅が非常に広く、その行動力・発想力はテクノ未来塾の塾生・会員に刺激を与えてくれていることに感謝しています。今回、川島さんとタッグを組んだ会員の藤川さんは、ご自身の会社のコア技術をフル活用して電動バイク具現化に貢献されたと伺っています。お二人がテクノ未来塾の塾生・会員に、テクノ未来塾における活動のお手本を示していただきましたことに合わせて感謝したいと思います。

「テクノ未来塾のバリュー（行動指針）は、多様なバックグラウンドを持った会員・塾生の多様な知による新しい知の創出のために、議論を通じて共に学び共に成長することとしております。そして、得られた成果を発信・社会実装することである」と、毎年の新年メッセージで繰り返し述べているところですが、今回のプロジェクトは、まさに今後のテクノ未来塾の展開のトリガーになるものであり、会員・塾生のお手本とさせていただきたいと思っています。

川島さんを核とするチーム川島は、テクノ未来塾が標榜してきた「相互の信頼関係をベースにアドホックで緩い繋がりのなかで学び、蓄積してきた知を存分に活かし、社会実装活動に邁進する」という理念の素晴らしい実践事例を示してくれました。チーム川島の更なる発展を祈念しております。

これを私のお祝いのメッセージといたします。

それでは、表彰状を読み上げます。

表彰状 産業デザイン財団賞

夢のせ快走、ものづくり共創チーム 川島 卓也 殿

開発事業名

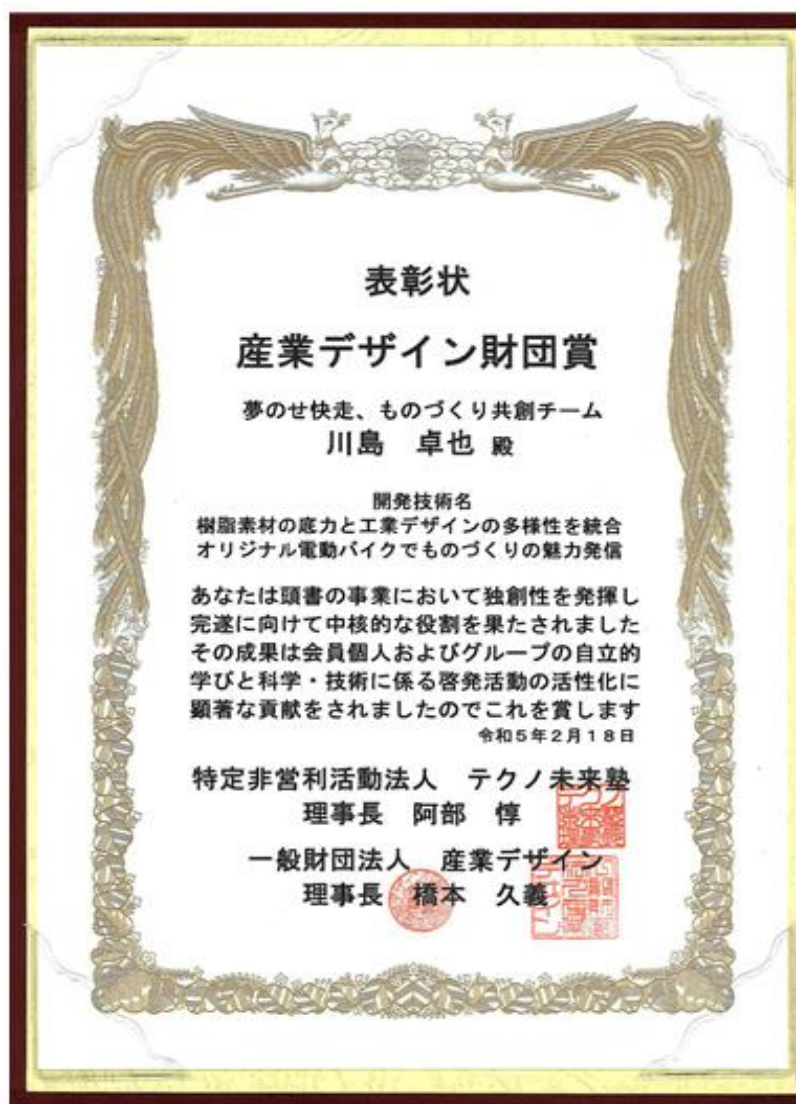
樹脂素材の底力と工業デザインの多様性を統合  
オリジナル電動バイクでものづくりの魅力発信

あなたは頭書の事業において独創性を発揮し完遂に向けて中核的な役割を  
果たされました その成果は会員個人およびグループの自立的学びと科学・  
技術に係る啓発活動の活性化に顕著な貢献をされましたのでこれを賞します

令和 5 年 2 月 1 8 日

特定非営利活動法人 テクノ未来塾 理事長 阿部 惇  
一般財団法人 産業デザイン 理事長 橋本 久義

以上です。川島さんはじめ関係者の皆さん、おめでとうございます。



## 2. 受賞者のスピーチ（川島 卓也氏）（抜粋）



この度はこのような立派な賞をいただき誠にありがとうございます。  
今日は自分の経験から話をさせていただきたいと思います。それは点と点を繋げるということです。

私がテクノ未来塾に入塾したのは今から 20 年くらい前のことで、最初の頃はフォーラムやゼミなどに参加していましたが、次第に行かなくなっていました。それでも他の分野のエンジニアの皆さんと交流を持つことが出来るのは、貴重な体験でしたので、当時から何かの役に立つだろうと会費だけは払い続けていました。

私がテクノ未来塾で真面目に活動を始めたのは 2015 年頃になります。それは、私が eBay で購入したマキ F1 という昔のマシンを復活させる活動をする為でした。今のところその活動は道半ばですが、幸いなことに2つの出会いがありました。一つは藤川樹脂の藤川社長、そしてもう一つは、コハクジャパンの岩田社長と出会ったことです。

もちろん当時はこの出会いがいずれ何かの役に立つとは考えもしませんでした。ところが数年後高校の同級生の加藤君と再会した時に繋がったのです。加藤君は東京都稲城市在住で、同じ稲城市在住の世界的メカデザイナーである大河原邦男先生とパイプがありました。その時に繋がったのです。大河原先生のデザインで岩田社長の e バイクを藤川社長の技術で架装して売ることになったのです。

もし私がテクノ未来塾を早々に辞めていたら、マキ F1 を eBay で購入していなかったら、サークルを立ち上げていなかったら、私はもっと面白くない人生を過ごしていたと思います。

それらの行動の点と点が繋がることにより、素晴らしい成果を上げることができました。もちろん、当時は将来をあらかじめ見据えて点と点を繋げる意識はありませんでした。しかし、今振り返ると、将来役に立つことをテクノ未来塾で活動していたわけです。

当たり前ですが、未来の為に、あらかじめ点と点を繋げることは不可能です。可能なのはあとから繋ぎ合わせることだけです。だから我々は、現在の行動や取り組みが、いずれ人生のどこかで繋がって実を結ぶだろうと気持ちを入れるしかありません。運命や出会い、偶然、宿命、いずれにしろ、我々は何かに希望を持っていかなければいけません。私はこのやり方を後悔したことはありません。むしろ今になって、人生の豊かさにおいて大きな差をもたらしてくれたと感じています。本日はありがとうございました。

## チーム・メンバーのスピーチ（藤川 勝也氏）

私は 2017 年 8 月の京都のオープンフォーラムに参加しました。その日、川島さんと出会って、マキ F1 というマシンを再現させたいんだという話に感動して、私の持っている技術で少しでも役に立つなら、という軽い気持ちで参加しました。少し時間が経って今回はギナイという電動バイクにデコレーションしたいということで、応援させていただきました。

我々もプラスチック製品を量産する仕事から、今はこういった形のないもの、皆さんの夢をそのまま形にして完成品に導く、ということを中心にやっておりますので、その思いと川島さんの熱意とが合致して出来上がってきたんじゃないかと思っています。ただ紆余曲折あり、ないものを作り上げるのがこんなにも大変なんだということを感じています。そういった中で今回、このような賞をいただきまして、早く市販型を完成させないといけないなと改めて思いました。この度はどうもありがとうございました。

### 3. 受賞プロジェクトの概要——応募者のプレゼン（川島 卓也氏）より（抜粋・編集）

《ご当地メカ MC021 ギナイの開発》というタイトルで発表させていただきます。

まず、なぜこの事業を始めたかという、テクノ未来塾で語られていたことを私なりに解釈して咀嚼したところ、こういうことを始めたら世の中のためになるのではないかと考えて始めました。

#### 日本の問題点(の一部)とアプローチ

○注目した問題点

- ・止まらない少子高齢化
- ・地方の過疎化
- ・ものづくりの危機

○問題点へのアプローチ

- ・少子高齢化→高齢者が現役だった頃の隠れ資産を発掘
- ・地方→アイデアのあるご当地商品を売り出す
- ・ものづくり→若い人に興味を持ってもらう

#### 本事業の構想

○アプローチの練り込み

- ・隠れ資産を発掘→往年のアニメメカデザインを応用
- ・地方→ご当地キャラからご当地メカへ
- ・ものづくり→アニメメカが現実世界に現れる！

○現実的な構想へ

- ・往年のアニメメカデザイン→大河原邦男氏に依頼
- ・ご当地メカ→大河原氏の地元稲城市をターゲットに
- ・現実化→デザイン自由度が高いeバイクを改装

#### MC021 ギナイのターゲット層

大河原邦男先生（機動戦士ガンダム等）のメカデザインにあこがれた20代～50代男性

- ・車は家族のためにミニバンでも、電動バイクなら所有できる（成人男性：本当はカッコ良いものがほしい）
- ・オイル・ガソリンレスなので、部屋置きが可能
- ・子供の目に触れやすく、次世代のメカ好きを育てる

◆問題としては、日本の大問題の少子高齢化、地方の過疎化、ものづくりの危機。この三点を合わせたものを、補えるものを何か事業としてできないかということを考えました。

◆少子高齢化へのアプローチについて。高齢者の人達が現役だった頃は日本が良かった時代で、その良かった時代は消費社会で全てのを消費してしまった。消費したものの中には捨ててしまったもの、財産もたくさんあったのではないかというのが私の考えです。これはテクノ未来塾の講演で、リクルートの藤井薫先生が「元々日本には死蔵された財産がたくさんある」とぼっと言って下さった、その隠れ資産に注目しています。

◆地方の活性化としてはアイデアのあることを売り出す、「ものづくり」と共創することによって若い人に興味を持ってもらう、ということを目指します。昔からロボットアニメが大好きで見ているので、往年のアニメメカデザインを応用したものを作れないか。ご当地キャラからご当地メカへ。ご当地メカを作ったらいい、と。

◆ものづくりとしては、現実でないアニメメカが現実世界に現れるということで、アニメを見ている子供たちも、ものづくりを知りたくなると思います。アニメデザインは大河原邦男先生に依頼、ご当地メカとして大河原先生の地元、稲城市をターゲットに、現実化としてデザイン自由度が高いということでeバイクを開発しました。

◆メカデザインのインダストリアル化についてですが、二つの梨を融合する。梨というのは稲城市の名産が梨ということでそこからきています。日本のアニメや特撮のメカデザインが世界的に人気であること、家電、EV等は細分化が進んでいて、この二つの特性を融合した新しい商品を作りたいということで始めました。「ギナイ」という名前は稲城を反対から読んでつけました。

◆魅力的な街づくりについては、共感されるビジョンの物語を稲城市に持って行ってアピールしました。

◆開発については、テクノ未来塾の会員である藤川樹脂さんに依頼しました。テクノ未来塾との繋がりによってほとんどのものができています。試作品ですが完成しましたので、今回の応募に至りました。



#### 4. 選考委員会 委員長より講評（理事 中村 善貞氏）



今年度も2件の応募があり、新たに選考委員会を編成(理事3名、会員4名)し、下記項目に沿って評価・協議・選考を行いました。

- 1) 活動が技術者個人の自立・自律を目指しているか。
- 2) 活動に技術者としての専門性が活かされているか。
- 3) 活動が新たな社会的価値を生み出しているか。
- 4) 活動がユニークであるか。
- 5) 活動がテクノ未来塾の他の活動に波及効果を及ぼしているか。
- 6) 活動が社会実装への貢献があり、外部に対し社会的インパクトを与えているか。
- 7) 活動に次なる展開の道筋があるか。

応募2件の活動はそれぞれ非常に良い活動で、なかなか甲乙つけがたいものでありました。これは、テクノ未来塾での活動が活性化していることを示していると思います。

受賞されたプロジェクトは、アニメに出てくるようなオリジナルデザインの電動バイクを、稲城市とメカニックデザインのレジェンド大河原邦男氏を巻き込み実現したというもので、個人の強い想いを起点として、その Vision に共鳴する専門家が次々と協力参加していき、キチンとモノとして創りあげることができた活動であった点が高く評価されました。



選考委員会の議論の中では、自分たちでオリジナルのバイクを製作するという自律・自立性、参画者がそれぞれの専門性を生かして一つのモノを創りあげている専門性、そして個人の想いをスタートに、実際にものにしてしまっているユニークさが評価されました。

活動がマニアックなものであり、強く共感する少数の人と、何を好き勝手なことをやっているのだと批判する多数の人とが存在する“イノベーティブ”なものと評価する意見がありました。また、ロマンを感じるという評価もありました。さらにこれが、「個別デザインによる

工業製品の創出」という普遍的な価値として認められて行くように活動されていく事を期待する、との意見もありました。

今年度、新しいプロジェクトやサークルの立ち上げもありました。さらに多くの会員の方に積極的に各活動に参画いただき、より活動が盛り上がりげればと願っております。

来年度も、多数の活動から産業デザイン財団賞に応募されるよう、宜しくお願いいたします。

以上